

教科書の『源氏物語』『若紫』垣間見小考

——教材化の史的変遷、そして史的文化状況の中の受容

原岡 文子

はじめに

明治期以来、多くの教科書に採録されてきた『源氏物語』の中で、現在の高等学校の教材として最も多く取り上げられるのが、「若紫」

（若紫の巻）の北山での垣間見を中心とする場面と言える。平成一・二年度高等学校国語教科書一七七の内、四四までが当該箇所を教材としていることも既に調査済みで、「国語」以外の「古典」教科書を含め現在の高校生のおおよそに何らかのかたちで教材として親しまれる当該箇所は、しばしば古典教材をめぐる研究の対象ともなっている。ただし「若紫」垣間見は、明治期以降一貫して最多登場の教材だったわけではない。改めてその教材化の変遷の様相に目を向け、教材化の文化、歴史的背景を考え、また逆に学習者の置かれた文化的な状況と学習者の教材受容の問題をも併せ、教科書とい

う媒体を通して『源氏物語』を読むことの在りよう、そしてその課題等を顧みることとしたい。

一 北山の垣間見をめぐる教材化——大正期の転換へ——

明治以来の『源氏物語』の教材化について旧制中学校、高等女学校、そして新制高等学校に亘る中等教育の膨大な教科書の調査、検証の労作として、一色恵理『源氏物語教材化の調査研究』がある。その成果からは、「須磨」を中心としつつ「若紫」「紅葉賀」「花宴」等多様な巻から教材を採択する明治期以来、様々な変遷を経て今日に至るまで、『源氏物語』が中等教育教材にかなり大きな位置を占め続けてきた様を明確に実感し得る。氏の労作に導かれつつ、本稿が中でとりわけ北山の垣間見の教材に注目するのは、もとより今日の教科書に最も数多く登場する教材であることと同時に、少女紫の

上がその人に酷似するという藤壺への思慕の張り付く箇所故に、折に触れて問題化することとなる父帝の妃との密事という『源氏物語』を貫くモチーフを負う部分であることに因っている。

例えば一九三八（昭和一三）年、国定教科書『小学国語読本』に現代語訳が登場した北山の垣間見は、現代語訳はもとより挿絵からも周到に「光源氏の存在を消す^す」という「教育的配慮」の施されたものだったが、にもかかわらず国学・国文学研究者橘純一氏は、これに対して削除を要求した。原作の「退廃した感情」への忌避に因るという。或いはその要求は、実は北山の垣間見がむしろ突出する趣で藤壺憧憬、密事のモチーフを負うことを、無意識の内にも探り当てた彼の感覚と無縁ではあるまい。小学校教材としての当該場面をめぐる一件は、北山の垣間見の負う両義的な危うさをはしなくも浮かび上がらせる。女子教育の範ともなるべき「無邪気な少女の姿」を刻む、世界に誇る日本の古典文学の代表として教材化にいかにもふさわしい、と見えつつ、その少女になぜ光源氏は惹かれたのかと問えば、義母藤壺その人の面影が否応なく浮上する。こうしたある種の危うさに向き合いながら、中等教育における当該場面の教材化がなされることとなったのか。その問いかけを頭の隅に置きながら、ひとまず教材化の史的変遷に目を向けてみよう。

一色氏によれば、明治期の旧制中学校教科書では、四八種中七冊

に『源氏物語』が採録、「須磨」が四とやや多く、「桐壺」「若紫」「明石」「少女」は二、その他第一部を中心にはほぼ均等に各巻から採録されており、その後現在に至るまでの教科書採録巻の選択の大筋はこれに連なるものとなっているという。明治から始まった「須磨」はいとど心づくしの秋風に、……」に始まる名文鑑賞が教科書での『源氏物語』学習の中心だった在り方は、やがて昭和戦前期に至るとさらに顕著となり、旧制中学、女学校ともに採録のおおよそは「須磨」に引き絞られていくこととなる。誇るべき「日本の古典」学習と、戦時に向かう国家の在りようの共存のために、名文鑑賞は無難な選択となった。

さて明治期の中等教育教材に採録された「若紫」北山小柴垣の垣間見を顧みると、例えば一八九七（明治三〇）年『新編国文読本』積善館（藤井乙男）には次のように記されている。

……肩のあたり、打ちけぶり、いはけなくかい遣りたる額つき、髪ざしいみじう美し。ねび行かむさま。ゆかしき人かなと、目留り給ふ。^{略中} 尼君髪を掻い撫でつ、、けづる事をもうるさがり給へど、をかしの御髪や、……

「中略」（傍線は筆者。以下同じ）とある部分には、もとより「さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人にとしよう似たまつれるがまもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる」（「若紫」①二〇七

頁^{頁5}）が入る。「限りなう心を尽くしきこゆる人」は、もとより藤壺その人でありこの条をはじめ藤壺思慕を省略する形での垣間見がこの時期の原則であった。ただし例えば一九一一年（明治四四年）女子国語読本」開成館（福井久蔵）など「さるは、……」の部分省略せずに採録するものも見られ、明治期の『源氏物語』教材化のおおらかさがうかがわれる。考えてみれば「中略」とわざわざ記す『新編国文読本』の形もある種のおおらかさを伝えるものにはかなるまい。

大正期に至って、例えば一九二四（大正一三年）『中等国語概説』六盟館（清水芳徳）「小柴垣」に、「さるは、……」の条がそのまま記されているのは、当該教科書が副読本であるためでもあろうか。^{注7}

一方、一九二六（大正一五年）年『新女子国文』明治書院（下田次郎ほか）「北山」になると、「うしろの山に立ちいでて、京の方を見給ふ」という光源氏による北山の景の眺望描写に終わっており、垣間見自体が姿を消すこととなったのは既に指摘される通りである。^{注8}また一九一六（大正五年）年一〇月『校訂中等国語読本』明治書院（落合直文ほか）「若むらさき」は、「瘧病にわづらひ給ひて」の「若紫」冒頭から「少納言の乳母」とぞ、人いふめるは、この子の後見なるべし」までを約七頁にわたって採録するものの、原文でその後に続く「さるは、……」の条が見えないのは言うまでもない。

さらにこの『校訂中等国語読本』は翌一九一七（大正六年）年一月に再版されており、再版の教科書からは何と「若むらさき」が消えてしまう。『土佐日記』の終末部「京人」と差し替えられたのである。東書文庫蔵の大正五年版は赤で「若むらさき」の部分に「削除」の筆が入ったものであることが確認される。そして大正五年版のわずか三ヶ月後に、「若むらさき」の姿を抹消した再版が出たことになる。東書文庫蔵本に「文部省寄贈」の付箋があることを顧みれば、「削除」はまぎれもない検定の指示であり、それに従って極めて迅速に再版がなされた、と推測される。^{注9}「ししこらかしつる」の部分にも赤線が記されることを考えれば、「難解な語が含まれる」し「長すぎるのでは」といった、検定者の思いも想像される。同時に「国民道徳ノ養成」を重視する「中学校令」「高等女学校令」がそれぞれ大正八年、九年に出されたこととの関連は見逃せまい。「御即位礼勅語」「菅公」「鉢の木」等いかにも「国民道徳ノ養成」にふさわしい教材題目の立ち並ぶ中で、「若むらさき」は場を失った。大正六年再版本は、「二三若むらさき」に代えて「二三京人」と題を一九一頁に表示するものの、一九一頁柱は「二三若むらさき」となっており、さらに一二三頁柱には「二四京人」とあって、こうした細かな表記の混乱からは、僅かな期間での再版作業の慌ただしさが生々しく伝わってくる。新学期を前にする突貫作業の蔭には、否応なしに往時

の教育目標の梃子入れが透き見えよう。「源氏物語」の採録自体がとりわけ大正一〇年以降の教科書からははっきりと減少しており、中で「須磨」を中心とする名文鑑賞のみが迫り出してくることも既に調査済みである。

やがての昭和戦前期、「源氏物語」教材化が「須磨」一色に染め上げられる状況は、「デモクラシー」の語を冠される大正期に既に発していることを確認したい。「国民道徳」「国家」を強固なものとし、戦う国家へと向かううねりの中で、教科書の中の『源氏物語』も、必ずしもはつきりとは見えない、小さな、けれど確実な変容を遂げていく。中で藤壺思慕などは、もとよりある種の不敬、規範を外れるものとして遠ざけられていった。こうした中等教育の場での『源氏物語』教材化の変容を辿る時、先に触れた「小学国語読本」の「若紫」現代語訳教材の「削除要求」は、まことに時代の必然であったということにもなろう。

二 昭和戦後、そして現在に至る北山垣間見教材化をめくって

戦後昭和二〇年代の新制高等学校においては、三二冊一五種の教科書に『源氏物語』が採録、中で「若紫」垣間見は最多の七種類一五冊の教科書の採録が調査されている。¹³「須磨」の名文鑑賞とは

一変する採録状況がここにはっきりと浮かび上がる。風景から人間へ、という変換の時は戦後の所謂民主化と背中合わせである。ただし例えば一九五〇（昭和二五）年『現代国語 三二 成城国文学会（富倉次郎ほか）を顧みると、「やよひのつこもりなれば」から六頁にわたって採録される北山行き、垣間見の条に藤壺思慕関連の叙述は省かれている。専ら髪をゆらめかせ走り込んでくる愛らしくも無邪気な少女の姿が大きく迫り出す趣である。藤壺思慕消去はこの時期の教材の定型だったという。¹⁴ エッフェル塔を背後に子どもたちが大きく躍動する姿が印象的なロベール・ドアノの写真「Les jardins du Champs de Mars, 1951」¹⁵が、一九四四年のバリ解放直後の作品だったことをふと想起するのは余りにも突飛であろうか。戦いが終わり、生命の溢れるもの、子どもの躍動を無意識のうちに自由の喜びと感動の象徴のように仰ぎ見るまなざしが、垣間見採録とドアノの写真に微かに通底する。確かに『源氏物語』の姫君は、一見愛らしく淑やかな婦徳の体現¹⁶とも見えるが、尊貴な姫は走ったりしない、という往時の規範を越えて走る姫君¹⁷、紫の上はまぎれもなく躍動する生命体である。時代の希望と光を負って、はじめて北山の垣間見は『源氏物語』教材の中心に躍り出た。そしてそれは子ども、少女の無垢にとりわけ大きく収斂するものだった。

一方、昭和三〇年代に至ると例えば『国語三』中央図書出版（遠

藤嘉基(ほか)が、「さるは、……涙ぞ落ちつる」の部分まで採録した形で「若紫」の段を終わらせ、当該箇所「藤壺のこと。光源氏が母に似た藤壺をしたつてゐることは、桐壺の巻にくわしい」と注記するように、藤壺思慕に触れる教材が通常のものとなつていき、藤壺思慕を消去することのないかたちが現在の教科書にまで引き継がれることとなる。例えば二〇〇七(平成一九)年『新編古典』東京書籍(小町谷照彦ほか)には、「さるは」「かの人の御代はりに」の部分に「藤壺の宮」を注記した上で、「学習」の項に「光源氏が、「十ばかり」の少女に心引かれていくのはなぜか」という課題を掲げている。美しく無垢な少女への思いと藤壺思慕とはつきりと関連づけるための配慮は確かに見て取れると言ふべきであらう。教科書における「若紫」は、原典を損なわぬあるべき姿を取り戻した、と考へて差し支えのあるはずもない。

もとよりそれを首肯しつつ、一方で個人的な小さな体験がもたらした違和感とも言うべきものがふと気にかかる。それは、一九九〇年代半ばから二〇〇〇年代のごく初期に、「若紫」垣間見に関して幾度か「光源氏のような「ロリコン」が高校の教科書に出てきて良いのでしょうか」という質問を受けた、という体験に発している。躊躇いながらのきまじめに問ひかけに、はじめて接した

時の衝撃が蘇る。「ロリコン」、即ち「ロリータコンプレックス」は、「男性が、性愛の対象として少女に偏執すること」^{註18}を意味する。文学作品にある種の「異常」性を負う人物の登場は大いにあり得るものの、光源氏の場合はそれとは明らかに異なること、亡母に面影の通う藤壺への思いの深さをむしろ証し立てるものとして、少女、子どもにさえ心打たれる光源氏を描くのだ、などと答えると質問者は安堵のうちに納得する様子だった。

ある時期にこの質問が繰り返されたのは、学生の生年からして、おそらく一九八〇年代の「ロリコン」漫画の隆盛^{註19}、そして関連する社会的な事件という文化状況と関わるものだったと推測される。藤壺思慕に関する条を省略した垣間見を学習した世代、その後昭和三〇年代など、藤壺思慕を明記する教材を学習した世代も含めておそらく学習者がこうした疑念に囚われ悩むことはまずなかったように思われる。文化、歴史の状況が、逆に学習者の読みに与える偏差というものに改めて気づかされる体験であった。

学習者は無論藤壺との相似に関して、教科書等で触れている。けれど、垣間見の構造、敬語の在り方など複雑な課題の重なる教材学習の中では、ごくあっさりとして藤壺に似ているという事実だけ的印象づけられる経緯だったのであらう。藤壺との関わりについては、光源氏幼児期の母、祖母喪失体験に遡って丁寧に説明することではじ

めて「正確に理解させること」が可能なのだと田坂憲二氏^註によって既に詳細に説かれるところである。

おわりに

『源氏物語』の教材化は、政治や教育をめぐるそれぞれの時代の動向を写し出すものとなっていることの一端を確認したが、同時に、時代の文化状況もまた学習者にある偏差を与えずにおかない状況も浮かび上がる。教科書の中の『源氏物語』は、おそらく学習者にとってはおおむねはじめて開かれる作品への窓となるものに違いない。だからこそ生々しくも重い、教材というものをめぐっては、できるだけ原典の持つ豊かさを学習者に伝える努力を怠るべきではあるまい。そのためには原典のモチーフ、読みを周到に伝えること以外には手立てがない。その意味で田坂氏の具体的な提案、或いはまた二〇一五（平成二七）年『高等学校古典A』第一学習社（伊井春樹ほか）に「藤壺の宮との過ち」（若紫）が取られていることなど、新たな心強い入門への道筋が見えてくるように思われる。

注

- (1) 田坂憲二「光源氏と若紫の少女との出会いをどう教えるか」『群馬県立女子大学国文学研究』二〇一二年三月
- (2) 神田龍身「源氏物語」北山での垣間見」「〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ」右文書院二〇〇三年、植田恭代「北山での垣間見」（同書）など。
- (3) 一色恵理「源氏物語」教材化の調査研究」溪水社二〇〇一年
- (4) 有働裕「源氏物語」と戦争」インパクト出版会二〇〇二年。なおこの時期の『源氏物語』受容の問題については、小林正明「昭和十三年の『源氏物語』」「国文学」学燈社一九九九年四月、安藤徹「源氏帝国主義の功罪」『想像する平安文学』第一巻勉誠出版一九九九年などの論がある。
- (5) 教科書引用以外の『源氏物語』本文の引用は、小学館新編日本古典文学全集による。
- (6) (3) に同じ。
- (7) (3) に同じ。
- (8) (3) に同じ。

- (9) (3) に同じ。なお朱筆「削除」についても言及されている。
- (10) (3) に同じ。
- (11) 以下、再版本の調査は、文科省教育政策研究所教育図書館の画像データによる。また大正五年版については、東書文庫で閲覧の機会を得た。ともに心よりの感謝を申し上げたい。
- (12) (3) に同じ。
- (13) (3) に同じ。
- (14) (3) に同じ。
- (15) ドアノ一の写真の題名は、シカゴ大学名誉教授ノーマ・ワイールド氏のご教示による。
- (16) (4) に同じ。
- (17) 拙稿「紫の上の登場」「源氏物語の人物と表現」翰林書房 二〇〇三年
- (18) 『小学館日本国語大辞典』第二版による。
- (19) 大塚英志『「おたく」の精神史 一九八〇年代論』朝日文庫 二〇〇七年
- (20) (1) に同じ。